

〈資料紹介〉名古屋城小天守台西から出土した鯨瓦

西本 菜由

キーワード

鯨瓦 小天守 土製瓦 多聞櫓 濃尾地震
鴟尾

はじめに

名古屋城のシンボルを問われたとき、多くの人が思い浮かべるのは大天守と大天守の屋根を飾る金のしゃちほこではないだろうか（写真1）。実際に名古屋城は「金鯨城」の異名を持つなど、江戸時代の頃より金鯨のイメージが強いお城であるといえる。

金鯨以外にも、名古屋城には多くの銅製の鯨が建物の屋根を飾っている。現存する西北隅櫓・西南隅櫓・東南隅櫓のほか、小天守及び正門においてその姿が確認できる（写真2）。戦災で焼損した銅鯨についても城内で保管されているものがあり、御蔵城宝館では間近で見ることができる（写真3）。

一方で、現在の名古屋城では土製の鯨の姿は確認できない。しかし平成30年度に行った小天守台周辺の発掘調査では鯨瓦の破片が2点確認された。本稿では、鯨瓦についての先行研究をまとめ、名古屋城で出土した鯨瓦の年代及び使われていた建物について検討する。

1 城郭における鯨瓦について

鯨瓦とは屋根の棟飾りに使われる瓦のうち、鯨の形をしているものである（写真4）。では鯨とは何かというと、海洋哺乳類のシャチのことではなく、想像上の生き物のことを指している。姿は魚で頭は虎であり、火除けの加護があるとされている。

同じく屋根飾りとして葺かれてきた瓦に「鴟尾」がある。鴟尾は日本において古代より使われており、寺院や宮殿の棟を飾っていた（写真5）。石製品、木製品、金属製品があるが、ほ

とんどが瓦製品である。鴟尾は元々鳳凰の翼をかたどったものと言われているが、魚の尾のようにも見えることから、火除けの加護があるとされることもある。なお古代の役人の沓に似ていることから沓形と呼ばれることもあるが本稿では割愛する。

役割がよく似ている二種類の棟飾りであるが、広辞苑に鴟尾は後世に鯨瓦・鬼瓦になると書かれている通り、鴟尾はやがて使われなくなり、鯨が棟を飾るようになる。

鯨瓦は中世に誕生したとされている。13世紀末に描かれた『男衾三郎絵詞』において大棟に鯨が据えられている様子が描かれている（松下2000）。また中世の鯨は15例現存しており、いずれも木製である（佐藤2009）。

当初寺社建築において使用されていた鯨瓦であるが、室町時代末には城郭建築においても使用されるようになる。城郭建築における鯨瓦の内、現在確認されている最古の鯨瓦は、安土城跡で確認されているものである（木戸2008）。安土城では採取品2点のほか、2個体分12点の出土が知られている（図1）。安土城出土瓦の製作技法については後述するが、安土城は天正4年（1576）に築城が始まり、天正7年（1579）に本丸が完成、天正10年（1582）には焼失したことが知られており、出土瓦の時期は明確に比定することが可能である。

2 鯨瓦の形式変化について

鯨瓦は鱗の表現等の変化である程度の年代観が与えられている。

宮崎氏は肥前名護屋城より出土した鯨瓦について、鱗の形状（製作技法）の違いにより、Ⅰ～Ⅲ類に分類した（宮崎1999）。Ⅰ類は胴部に手作りの鱗を一枚ずつ重ね合わせて松笠状にするタイプ（貼付け）、Ⅱ類は胴部本体にウロ

コを一枚ずつ切り込んで成形させるタイプ（篋描き）、Ⅲ類は胴部本体に製作器具を用いて鱗を押印するタイプ（押印）とした（図2）。貼付け、篋描き、押印の順に出現したとされているが、肥前名護屋城ではこのⅠ～Ⅲ類が混在して確認された。貼付け式については安土城、松ヶ島、河後森城にあり古いものに目立つとされる（乗岡 2018）。

篋により U 字に鱗が刻まれるものについては、岐阜城及び近江八幡城で出土する鯢瓦に端を発すると考えられる。大量生産の過程で鱗の表現が簡略化したことに伴う変化とみられる。鱗の簡略化はさらに進み、U 字スタンプによる押印に変化していく。この変化は天正 16（1588）年以降とみられ、鯢瓦が城郭に使用されるようになって以降、大量生産が進んでいく過程で、短期間に技術が変化していく様子が確認できる。

加えて製作技法にも変化がみられる。安土城出土の鯢瓦は、鰭が体部を含めてすべて一体型の一本作りであるが、天正 16 年以降は鰭の差し込み式や胴部の合体式などが認められる。この変化についても大量生産が進んだことに伴う変化とみてよいだろう。

また形状についても時期によって変化がみられる（木戸 2006）。個体差・地域差はあるものの、天正 4（1576）年～天正 11（1583）年ごろは、顔がのちの馬面や龍面よりも魚面に近く、胴部の反りがきついとされる。全体的に織豊期のものは元和以降のものに比べて「体部がずんぐりして、直立気味で反りが弱く、下部が三角形状を呈したり、尾鰭の付根が締まらないといった特徴を持つ」（乗岡 2018）。家康期以降の鯢瓦は尾鰭が二股に分かれるが、信長・秀吉期の瓦はそうではないという特徴も指摘されている（佐藤 2009）（図 3）。

以上述べた通り、鯢瓦については鱗の表現

方法、製作技法、体部及び尾鰭の形状の変化によって型式変化をある程度追うことができる。しかし肥前名護屋城で鱗の表現方法が 3 タイプ混在することからも、明確な区切りはないようである。

3 名古屋城出土の鯢瓦について

名古屋城では平成 30 年度に行った小天守台周辺の発掘調査（木村・西本 2019）において、鯢瓦の破片が 3 点確認されている（図 4）。3 点の内訳は胸鰭または耳周辺の体部と思われる破片が 1 点と鰭部と考えられる破片が 2 点であり、体部片では鱗が認められる。鰭はいずれも片面が平坦であるため、胸鰭か腹鰭と思われる。鱗は U 字スタンプで表現されている。U 字スタンプによる鱗の表現は天正 16（1588）年以降に出現したとされており、名古屋城から出土する鯢瓦の形式としては妥当なものといえる。耳の付近で鱗は反転しない。

鰭については小片のため判断が難しい。

平成 30 年度調査で出土した鯢瓦であるが、本来葺かれていた建物はなんであったのだろうか。出土位置は小天守台の西側に設けた調査区である。小天守は現在銅製の鯢が棟を飾る。この銅製鯢瓦は名古屋離宮時代に江戸城から運ばれたものとされている。しかし金城温古録には「鱗亦、土瓦なり」という記述があることから、少なくとも幕末に葺かれていた鯢瓦は土製であった可能性が高い。小天守に葺かれていた鯢瓦が土製であるならば、出土した瓦は小天守に葺かれていたものであるのだろうか。

鯢瓦片を含んでいた層位は現地で二段階確認された瓦を大量に含む層の下層の方である。刻印のある築石大の石材を含んでいることが特徴で、堆積時期自体は不明であった。

小天守周辺で大規模な造成を行った時期として考えられるのは、戦後の現天守閣再建工事時

と戦後に焼け落ちた建物等を片付けた時、明治24（1891）年に起きた濃尾地震によって倒壊した小天守西側の多聞櫓を解体した際の工事時である。

名古屋城内で行った調査成果から、現天守閣再建工事時に造成された層や戦災ガウを処理した層には焼土粒や被熱した瓦を含むことが多い傾向が判明している。しかし、小天守台西側の調査区では被熱した瓦はほとんど確認されず、焼土粒もほとんどみられなかった。よって配管の埋設等は一部見られるが、戦後の造成によるかく乱はほとんど及んでいない調査区であったと考えられる。

瓦を大量に含む二段階の層は戦後の工事に由来するものでないとするならば、残る可能性は明治24年の濃尾地震に由来する工事の結果と考えるのが妥当であろう。二段階確認された瓦を大量に含む層の上の方の層では漆喰を大量に含んでいることを確認していることから、多聞櫓撤去時の材を埋めた可能性が高く、濃尾地震後の造成工事という説を補強できる。

ただし上層は濃尾地震後の造成工事と考えられても、二段階確認された瓦を大量に含む層の下層の時期は不明である。特に築石大の石材を含んでいる理由について理解することが難しい。築石に確認できた刻印は浅野家が使用していた刻印であった。同じ刻印のある築石は小天守台西面でもみられることから、石が小天守台西側周辺にあることは不思議ではない。しかし使用しなかった石材を築城期すぐに埋めたとするならば、石材を埋めている土が瓦を大量に含んでいたという事実と矛盾する。築城期に大量の瓦の廃材がでるということは考えにくいからである。

また小天守西側の斜面には江戸時代中のある時期まで雁木が存在していた（図5）。雁木を撤去した時期は定かではないが、その時期に合

わせて大きな改変があったと考えるのが妥当であろう。ただし雁木を撤去した工事の際の堆積だとして、瓦を大量に含むことに疑問が残る。建物の廃棄を伴わない工事において、瓦が大量に廃棄されることは少ないだろう。

一番理解しやすいのは、2時期に区分している大量の瓦を含む層を1時期の堆積と考え、すべて濃尾地震後の工事の所産とする説である。小天守西側の多聞櫓を解体しているため、大量の瓦は廃棄される。ただし鯰瓦が濃尾地震によって倒壊した多門櫓を含む建物に使用されていたかは疑問が残る。

いずれにせよ土層の時期がまた問題になるが、時期を比定できるような陶磁器類は出土しなかったため、これ以上の推察は現時点では困難である。

おわりに

名古屋城小天守台西面の調査において出土した鯰瓦について、時期及び葺かれていた建物について私見を述べた。

鯰瓦の製作時期はおおよそ築城時として良いと考えられるが、廃棄時期は不明である。状況から想定すると、同時に廃棄されていた瓦については多聞櫓に使用されていたものとするのが妥当であると考えている。離宮期に葺きかえられたことから同時期に小天守の鯰瓦が破損した可能性がある。

現在名古屋城内の建物の棟を飾る鯰は銅製であり、土製の鯰はみられない。離宮期に取り替えられているので、焼損した金属瓦として所蔵されている鯰も全て銅製である。築城時から幕末にかけて、江戸時代の名古屋城の姿を検討していくうえでも、土製鯰瓦の存在は重要な位置を占めると考えている。今後の資料の増加に期待したい。

参考文献

- 伊藤雅乃 2011 「広島城跡上八丁堀地点出土の金箔瓦について」『金箔瓦の系譜』、財団法人広島市文化財団 広島城、pp56 ～ 59
- 大脇 潔 1999 『日本の美術』 391 鷗尾、至文堂
- 木戸雅寿 2006 「織豊系城郭における鯨瓦の意義」『淡海文化財論叢』 1、淡海文化財論叢刊行会、pp258 ～ 263
- 木戸雅寿 2008 「城郭における「鯨瓦」の成立と展開」『季刊考古学』 第 103 号、雄山閣、pp37 ～ 40
- 木村有作・西本茉由 2019 『特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書』、名古屋市
- 佐藤大規 2009 「広島城出土の金箔鯨瓦についての考察」『広島大学総合博物館研究報告』 1、広島大学、pp1 ～ 11
- 篠原達也 2011 『金箔瓦の系譜』、財団法人広島市文化財団 広島城
- 千田 嘉博 2021 「金鯨の歴史的意義」『名古屋城金シャチ特別展 公式ガイドブック 2021』名古屋城金シャチ特別展覧実行委員会、pp16 ～ 23
- 乗岡 実 2018 「織豊期城郭建築の棟を飾った瓦」『織豊城郭』 第 18 号、織豊期城郭研究会、pp111 ～ 141
- 松下 浩 2000 「城郭と鯨」『日本の美術』 404 城と天守、至文堂、pp86 ～ 98
- 三浦正幸 1995 『石垣が語る城の歴史・広島城』 歴史群像名城シリーズ 9、学習研究社
- 宮崎博司 1999 「肥前名護屋城出土の飾瓦」『博物館研究紀要』 第 5 集、佐賀県立名護屋城博物館、pp47 ～ 83
- 山下大輝 2017 「鯨瓦」『織豊系城郭とは何か』、サンライズ出版、pp206 ～ 207

《Title》

Shachihoko, excavated from the west of the small castel tower of Nagoya Castle

《Keyword》

Shachihoko, small castle tower, earthenware roof tile, Tamon-yagura(tarret), Nobi Earthquake, Shibi(ornamental ridge-end tile)



写真1 金鯨が乗る大天守（北から）



写真2 西南隅櫓銅鯨瓦（南から）



写真3 名古屋城所蔵の銅鯨



写真4 鯨瓦（日本城郭研究センター前 筆者撮影）



写真5 東大寺大仏殿の棟を飾る鴟尾（筆者撮影）

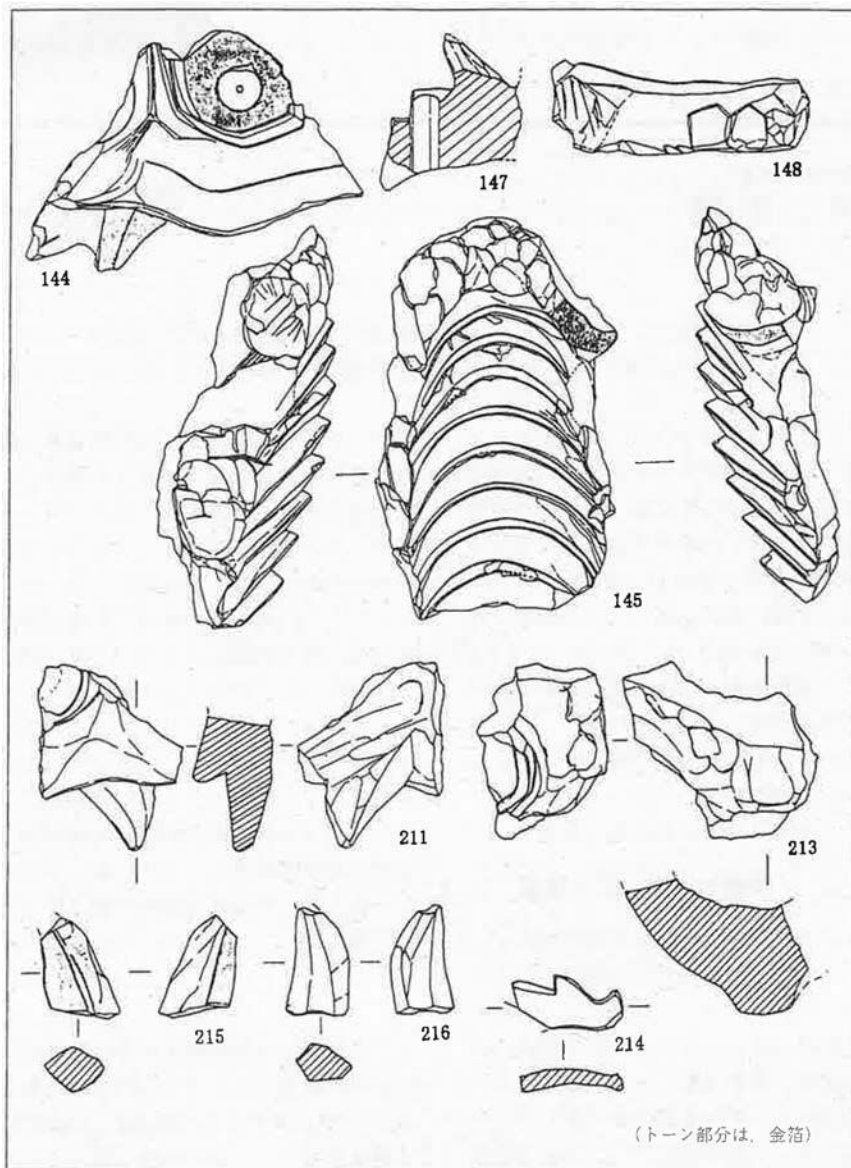


図1 安土城跡伝米庫出土金箔鯨瓦

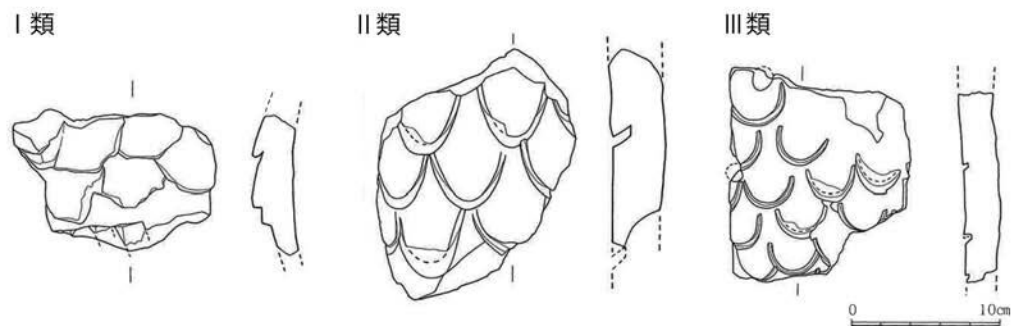


図2 肥前名護屋城鯢瓦の鱗表現のタイプ（宮崎 1999 より作成）

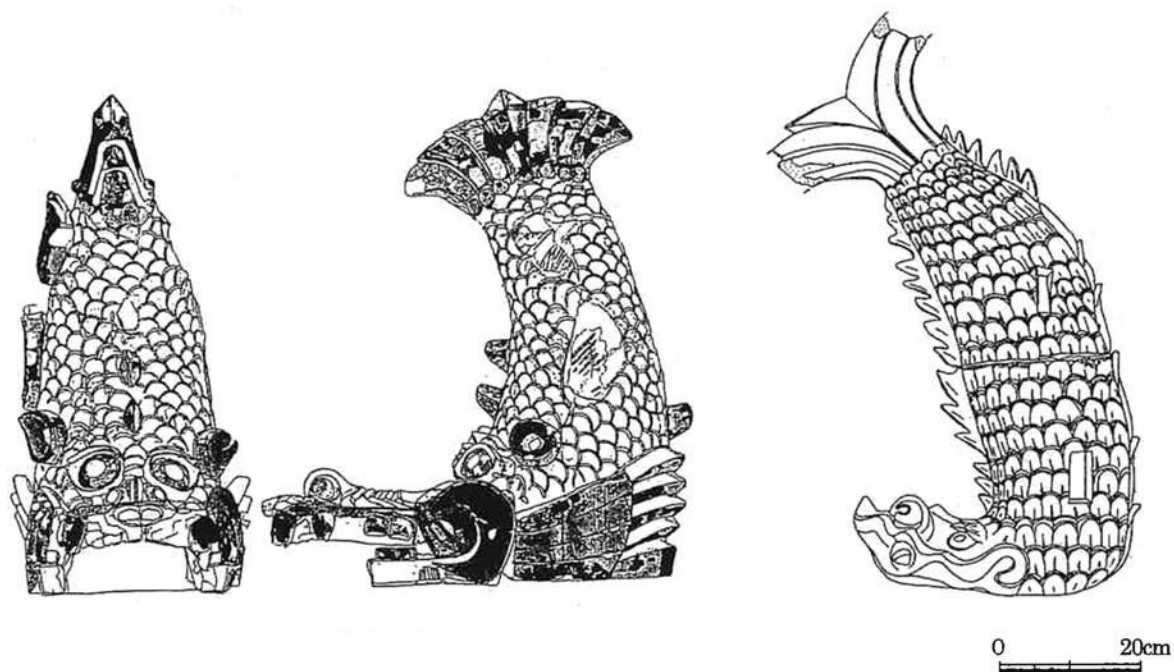


図3 広島城八丁堀跡出土鯢瓦（左）と淀城出土鯢瓦（右）（乗岡 2018 より作成）

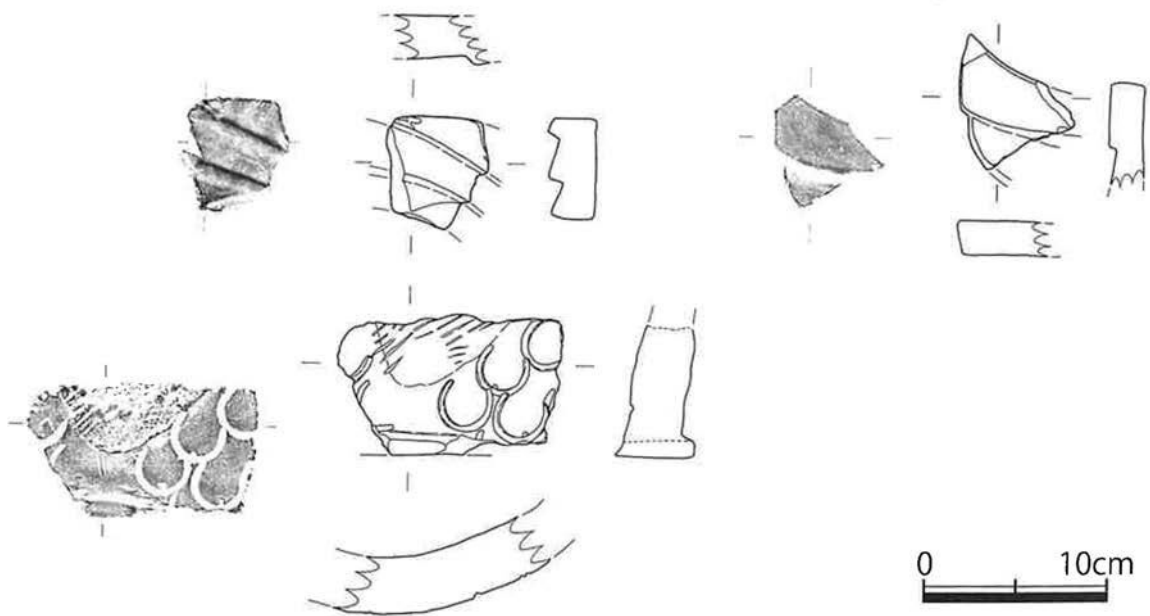


図4 小天守西出土鯰瓦片3点（木村・西本 2019 より作成）

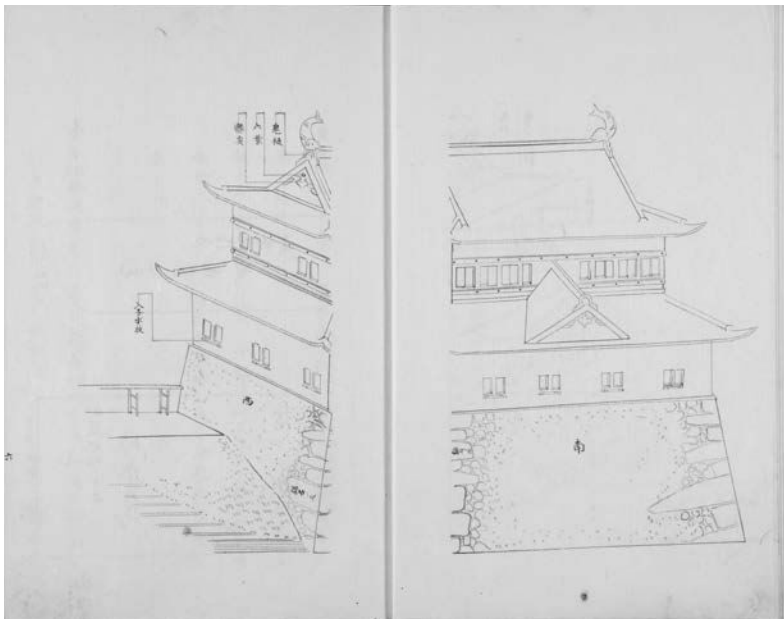


図5 小天守大体（西・南面）（金城温古録より）